

令和5年度（2023年度） 第3回東海市不登校対策協議会 会議録

- 1 日 時 令和6年（2024年）1月24日（水）
午後3時から4時
- 2 場 所 市役所302会議室
- 3 出席者 社会福祉協議会 地域福祉課長 宝達 真志
知多児童・障害者相談センター児童福祉司 柘植 優奈
東海市立富木島小学校長 杉江 桂
東海市立加木屋中学校長 伊藤 雅登
東海市立三ッ池小学校養護教諭 家田 好美
東海市立上野中学校生徒指導主事 木原 啓裕
幼児保育課 指導保育士 川口 満子
女性・子ども課主任 木村 智明
健康推進課 主任指導保健師 大串 文子
- 4 傍聴者 なし
- 5 事務局参加者
東海市教育委員会 教育長 加藤 千博
学校教育課長 桜井 正志
学校教育課 主任指導主事 明壁 啓純
" 指導主事 高橋 民子
" 統括主任 永田 紀子
" 教育相談員 坂口 栄子
適応指導教室 ほっと東海
教育相談員 武田 基二
教育相談員 深谷 公子
スクールソーシャルワーカー 飯田 彩花
スクールソーシャルワーカー 西 実莉
スクールソーシャルワーカー 甲斐茉莉美
- 6 会 議
 - (1) 教育長あいさつ
 - (2) 会長あいさつ
 - (3) 協 議
 - ① 今年度の取組について
ア 取組の概要について（指導主事より資料に基づいて報告）
○年度当初の計画どおりに行うことができた。

○不登校傾向あるいは不登校の児童生徒について、担任を中心として複数の教職員等でチームを編成し、個々に応じた支援を行った。12月末の時点で、学校の居場所づくり事業で配置された心の相談員と、養護教諭が保健室等で相談を受けたのはのべ2,790件、スクールカウンセラー派遣事業では667件の相談を受け、その内不登校の相談件数は232件あり、児童生徒、保護者、不登校児童生徒に関わる教員等の心のケアが図られた。スクールソーシャルワーカーが対応した件数は、12月末時点で支援と見守りを含めて76件で、学校と行動連携を図り、他機関と連携して支援を行った。また、電話相談・窓口相談では、不登校に関する相談件数は51件あり、学校やほっと東海と保護者が相談できるようにつないだ。

イ 不登校児童生徒の状況について

ウ SSWの活動の状況について

エ 適応指導教室の状況について（教育相談員より資料に基づいて報告）

- 入級者数は年々多くなってきている。特に小学生の入級者も増えている。
- 学校や関係機関と連絡を密にして、子供たちが学校復帰できるよう日々取り組んでいる。リラックスして馴染める雰囲気作りを心掛けるとともに、体験活動や人との関わり合いを大切にしている。
- 芸術劇場での名フィルのリハーサルや「出会いの教室」、農務課からの「みかん狩り」、ほっとプラザの「干支作り」「カードゲーム」、横須賀図書館によるブックトーク、ケアラズカフェのイベント、ボランティアによる書道教室など、多くの関係機関や施設の協力により参加できる体験活動の機会を増やしている。

② 今年度の取組の成果と課題について

ア 成果について

- 昨年度不登校だった児童生徒が、学校復帰や「ほっと東海」への通級ができるようになった。学校全体でグループ支援に取り組み、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の知見も得て、その子どもにとっての安心感や前向きな気持ちを醸成できた。
- 家庭的な要因を背景にもつ家庭に対して、スクールソーシャルワーカーが介入し、関係機関との連携が図られたことにより、児童生徒や保護者への支援を行うことができ、状況が改善された事例が多くみられた。
- 不安や悩みをもって訪れる児童生徒を心の相談員がいつでも受け入れ、教員と連携して支援をすることにより、不登校の未然防止につながっている。

イ 課題について

- すべての子どもたちが学校・学年・学級を「魅力ある場所」と感じられるように、あらゆる教育活動において「未然防止」の取組を推進し、「心の居

場所づくり」と「絆づくり」に努め、自己肯定感、自己有用感、安心感を得られる機会を今後も増やす必要がある。そのためには、学校の日常的な取組が不登校の未然防止につながることを教員間で共通理解し、「チーム学校」として組織で対応していく必要がある。

○状況改善や登校に向けて、複合的な要因を抱える家庭に対して、福祉部局との連絡を密にして多職種連携を図り、家庭の状況に対応して児童生徒及び保護者を多面的に支援していく必要がある。

○不登校の兆しが見られた場合、子ども一人一人の状況を丁寧に把握し、組織で本人の状況に応じた早期対応ができるようにする。

③ 主な意見

○子どもたちの居場所づくりが大切であり、別室対応もその一つである。

○1日学校に居られなくても、1時間でも授業を受けさせるなど、子どもの状況に合わせて登校計画を立てることを大切にしている。

○担任の先生がしっかりと本人や保護者と話をして、関係性をつくることが大切である。

○たくさん子どもたちが学校へ行けないのは、とても辛い状況である。

○個別の支援が必要な子どもが増えてきており、その要因をもった子どもも多いのではないかと。何かうまくいかない、友達との関わりがうまくいかない、授業の中で分からないことがあることを発信できないでいるなどつまり原因がどこかにあり、それを保護者の方が上手にフォローできればよいがフォローがうまくいかないのは、子どもとうまく向き合えていなかったり、コミュニケーションがとれていなかったりする部分もあるのではないかと。

○幼少期から子どもと親との関わりや関係性がしっかりとできていれば、後になって色々な問題が出てくるのも少ないのではないかと。

○幼児教育の中でも、子どもが抱えている問題を先送りにすることなく、解決できることは今解決していけるようにしていきたい。

○家庭環境を起因とする不登校の児童生徒の中には、父親や母親の関係に問題があり学校に通いづらい状況にあることが考えられる。

○不登校児童生徒の中には、長期にわたり顔を見ることができない子どもがいる。その場合は福祉機関と学校が連携を図り、家庭訪問等を継続して行う必要がある。

○家庭環境が要因である不登校児童生徒の家庭には、歴史があり、事情があり、力の得手不得手があり、貧困や障がいを抱えているなど、様々なストーリーがある。幼少期からの家庭環境や親の状況も大きく関係している。家庭を運営することは簡単なことではなく、色々な価値観や社会に臨んで確立していかなければならない厳しさがある。そういったことが難しい家庭では、ネグ

レクトなどの問題が起きる。そんな中で育った子どもたちは、生活習慣を身に付けることが難しく、標準を求められても苦しく、学校でも周りと同化することができない。そのため、家庭全体を見ていき、家庭のストーリーを分析し、今何が必要か考えて、家庭の悩みに寄り添いながら（伴走型）支援に取り組んで行くことが必要である。

- 人間の前頭前野は、36ヶ月、就学前までに出来上がり、親とやりとりをして、気持ちをなだめてもらったり、楽しいことを膨らませてもらったり、お腹が空いたらお乳をもらったり、何万回と繰り返される中で育っていく脳である。近年は、0歳でも動画を見せているため、親とのやりとりの部分が動画にすり替わっていつの間にか消えている。表情をよむことや発信することなど、赤ちゃんが泣きと視線と態度で示すが、それが動画で返ってくる環境になってきていて心が痛い。子どもの育ちの保証をどうしていくかが大きな課題である。
- 子どもたちにとって、家庭での居場所や学校での居場所があるが、第3の居場所「サードプレイス」がないと子どもたちはやりきれないのではないかと懸念されている。
- 第3の居場所にくる子どもや母子に対して、スクールソーシャルワーカーがほどよい距離感で丁寧な寄り添いや介入をしてくださっている。
- 東海市の3人のスクールソーシャルワーカーだけでは見切れないほど、スクールソーシャルワーカーを必要としている多くの児童生徒がいる。
- 福祉サイドにおいても、スクールソーシャルワーカーのような寄り添う支援や介入が必要不可欠になってきている。
- 「つどいば」など第3の居場所で、学校では普段褒められることのない日常生活について親子のよいところ探しや寄り添いで、子どもも親も生き生きとしてくる。
- 今後は、保健と福祉と教育の連携がより必要になってくる。